

忠友(水野出羽守忠友)筆・沼津侍従忠成(水野忠成)筆
馬図

水野出羽守忠友は初代沼津水野藩主、忠成はその養嗣子で2代沼津水野藩主です。

それ以前、水野家は信濃松本水野藩7万石の大名でしたが、享保10年(1725)6代忠恒が江戸城松之廊下で長府藩世子の毛利師就に切りかかるという刃傷沙汰を起こして改易(松本御大変)になりました。

水野家は家康の母、於大の方の生家という名門の家系であったため、忠恒の叔父にあたる忠毅が家督相続が認められ、7千石の本身旗本として名跡は保たれましたが大名の身分は剥奪されてしまいました。その忠毅の嫡男が忠友です。

忠友は、将軍家治等の信任を得て登用され、明和5年(1768)には1万3千石の大名となり、安永6年(1777)には2万石に加増、沼津に転封となりました。老中田沼意次の重商主義を支えるとともに、嗣子がなかったため、娘の八重に意次の4男金弥を迎えて養嗣子忠成とします。

水野家の記録である『御代々略記』には、「安永二

年四月十五日 忠友公御男子不被為在候付田沼主殿頭様次男田代金弥様、後中務少輔忠徳公、御養子被成御二女八重姫様江御縁組被成度旨御願之通被為蒙仰候、但金弥様今日より若殿様与奉称候事、尤御引移者安永六酉年十二月也、夫より後十ヶ年目、天明六年年御離縁ニ相成」とあります。

田沼意次が長男意知の暗殺後の天明6年(1786)に失脚すると急ぎ忠徳を離縁、廃嫡とし、代わりに分家の旗本水野忠成を養嗣子としましたが、老中松平定信の指示で老中を罷免されます。

それでも、忠友は10年後の松平定信の失脚後、老中復帰を果たします。継いだ忠成も家斉の信任を得て老中筆頭まで出世し、田沼時代の再来といわれる施策を主導「水の出て元の田沼になりにけり」とも評されています。

その一方で離縁された忠徳(田沼家に戻り意正)を移封先の陸奥下村から旧領の相良1万石に復帰させるのに尽力したと伝えられます。

この資料は、忠友と忠成の描いた馬の画を一幅の掛軸に仕立てたものです。

駿河湾の漁

川口 洋司さんの漁話

川口組の真鶴出漁

大正時代末～アジア・太平洋戦争前にかけて静浦地区志下の網組は駿河湾を離れて紀伊地方に出漁してマグロを捕っていました。また、我入道地区の網組は、アジア・太平洋戦争後、サバ釣漁を行うために駿河湾内だけではなく北は東北地方から南は韓国の済州島まで出漁しており、サバがいるところを求めて日本を超えて駆け巡っていました。一方で、川口さんが住む静浦地区獅子浜の網組は駿河湾周辺で船曳網漁や巾着網漁を行うことがほとんどでした。

川口さんが所属していた川口組では早くから発動機船を導入していたため、石花海（石花海の詳細は資料館だより234号参照）のような少し離れたところまで出漁していましたが、それでも駿河湾内であることには変わりはなく、川口組で行っていた漁のほとんどは日帰りによる漁でした。日をまたいで焼津港や下田港へ寄港して漁を行っていたこともあります。長くても2日程度の逗留でした。例えば、伊豆七島周辺でのカツオ・マグロ巾着網漁では、下田港で1泊し、魚が捕れた時点で沼津港へ戻って水揚げをしていました。2日を超えての逗留は乗組員から不満が出てしまいそれ以上の逗留はできませんでした。

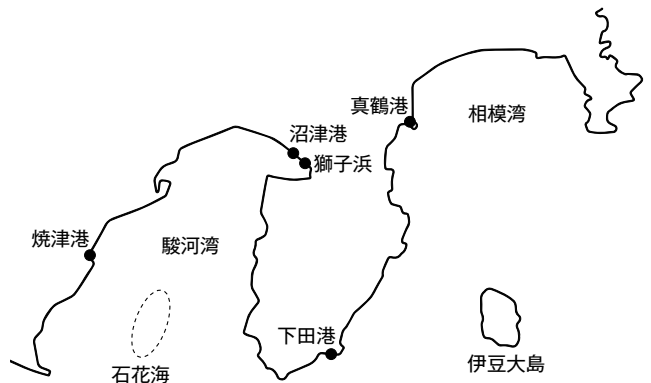
今から60年ほど前、川口さんが川口組に入る前の高校生だった頃、川口組が神奈川県の実鶴港を基地として1か月ぐらい寝泊りをしながら伊豆半島の東、相模湾でカツオやマグロを捕る巾着網を行っていたことがありました。それは相模湾側でカツオ釣りの生餌となるイワシの生簀を曳く手伝いをしていた知り合いの漁師から相模湾でマグロを多く見かけるといふ情報を得たことがきっかけでした。当時はカツオやマグロを捕るような網漁を行う船が相模湾側に少なかったため、相模湾で漁を行えば多くの漁獲を望めました。神奈川県で漁を行う許可を取ることができましたが、最大の問題は数日の逗留を伴う出漁でも不満を漏らす乗組員たちを1か月ほどの滞在を伴う相模湾へいかに連れていくかでした。3家あるツモト（網組を設立した時に中心となって出資した家）の一つである川口さんの父が乗組員を説得してなんとか真鶴港を基地としてカツオ・マグロ巾着網漁を行うことになりました。相模湾で漁を行うにあたって、川口さんの父親はひとり箱根神社へ向かい、川口組の操業の無事と大漁の祈願を行うほど、相模湾での漁に思いが込められていました。8月～9月にかけての1か月、毎朝、真鶴港から出漁し、漁が終わればまた真鶴港へ帰港するという生活が続きます。真鶴港では陸にあがって旅館に宿泊するわ

けではなく、港に停泊した川口組の長宝丸の船内での寝泊りです。食事も船内の調理場で調理された食事を船内で食べます。1か月間の相模湾での操業成績は悪くはありませんでしたが、やはり乗組員から不満が大きくなり、3年で相模湾での出漁を取りやめることになりました。

駿河湾を離れての漁に対する乗組員の不満は川口組だけに限らず、他の網組でもありました。沼津近海で小型のイワシが捕れなくなった昭和50年代初め、それを原料として煮干しを作っていた静浦地区の煮干し製造業者が北陸地方へ転出して煮干しを製造していました。この煮干し製造業者が静浦地区の網組を北陸へ呼んで小型のイワシを捕らせようとしたのですが、やはり北陸まで行くことを嫌がり断念せざるを得ませんでした。

川口組の乗組員が駿河湾から離れたがらない最大の理由は、わざわざ遠くへ出漁しなくても駿河湾内の漁で十分な漁獲を得ることができたという点です。川口さんが川口組に入った当時、静浦地区には大小多数の網組が各集落に存在していました。それだけ多くの漁師たちの生活を支えられるほど当時の駿河湾は海洋資源が豊富だったことを物語っています。

（話：川口洋司氏 昭和17年生まれ 沼津市獅子浜在住）



図：獅子浜を中心とした周辺図



写真：真鶴出漁の頃に使用していた川口組の第五長宝丸と第七長宝丸（1964年頃）

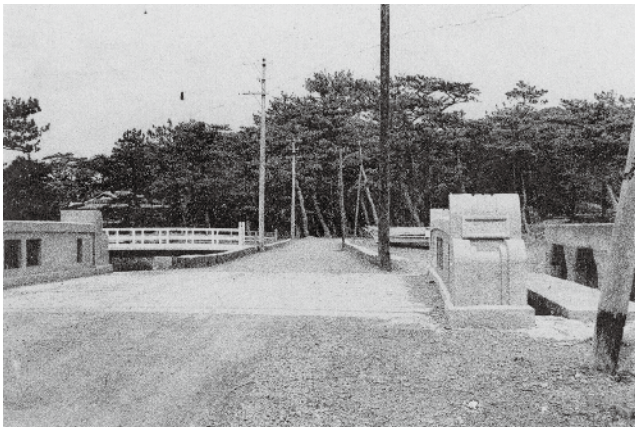
川口洋司氏写真提供

皇室ゆかりの地探訪 1 2つの「みゆき橋」

昭和13年(1938)富山房刊行の『皇室辞典』によれば、「御幸」とは「行幸」とともに天皇の外出に用いられる用語であり、皇后、皇太后や皇太子の場合は「行啓」、それ以外の皇族の場合は「御成」の用語が用いられるとあります。市内には御用邸があったことから皇族の来訪に因んでつけられた名称がいくつか見られます。

地名としては、上香貫の「御幸町」があります。もともと狩野川左岸のこの辺りは菜園場と呼ばれていましたが、昭和4年(1929)5月に右岸の三枚橋とを結ぶ橋(三園橋)が新たに架けられたため、それを機会にそれぞれの地名から一字をとった三園町と改称され、さらにその北側の一部が昭和5年5・6月の昭和天皇の静岡県下巡幸の際、東部県民奉拝場となった第四尋常高等小学校への行幸を記念して、御幸町と改称したとされています。この時、三枚橋の沼津蘭市場にもお成りになり、その往復に三園橋を通輦したため名誉ある橋と『沼津市誌(全)』には記されています。

また、橋梁の名称では、港橋の架替により、明治45年(1912)7月に開通し、大正元年に改称された「御成橋」があります。沼津駅から御用邸に行き来する皇族や皇室関係者など高貴な人たちが必ず渡る橋であり、御用邸へ向かう通称御成道につながる橋であることからこの名称がつけられたとされています。



うしぶせ きゅう みゆきばし
牛臥の旧御幸橋



きゅううしぶせ みゆきばし
旧牛臥御幸橋の銘板石

御成橋の下流に明治15年(1889)に架けられた入船橋は、明治33年(1900)の架け替えの際に、ご成婚直後の皇太子と皇太子妃が渡り初めを行い、その榮譽を永代に伝えるために永代橋と命名したとも伝えられます。

このほかに2つの「みゆき橋」があります。1つは牛臥の塚田川(浜水門川)の河口の浜水門に隣接して牛臥往還に架けられたコンクリート製の桁橋です。令和3年3月に新たな橋に架け替えられましたが、以前の橋の銘石板には「御幸橋」「みゆきはし」「濱水門川」「昭和十年十一月竣功」(1935)とありました。

この橋の架橋以前にも水門の上を通ることができたようで、同じ橋かどうかは不明ですが『昭和天皇実録』には明治40年(1907)に「御幸橋」の記載が見られます。

皇孫の養育に当たった川村義純の別荘や後の西付属邸に滞在した三皇孫殿下は御運動と称する散歩や御成と称する三島館などへの外出の際にここを通行していました。皇后時代の明治39年から長期間本邸に滞在し、大正3年(1914)4月にここで崩御された昭憲皇太后もここを通過して我入道の松原などで摘草などをされていました。明治天皇がこの地に行幸した記録はないので、皇后の場合も御幸の用語が使われたとも考えられます。新たに架設されたとすると、御幸町の命名と同じく、昭和天皇の静岡県下巡幸に際し沼津御用邸に滞在された、昭和5年5月の通行に因むものである可能性が高いと思われます。

もう1つのみゆき橋は下香貫前原の新川(新堀・浜水門都市下水路)とバス通り(沼津四日町往還)の交差する位置の「行幸橋」です。幅員約5.8m、長さ約6.8mのコンクリート製桁橋の欄干の親柱には「行幸橋」「みゆきはし」「昭和四年五月竣功」(1929)と刻まれています。昭和4年以前に天皇として行幸の際にこの橋を渡ったとすると大正天皇と昭和天皇ということになりますが、昭和天皇の昭和2年9月の行幸は特別演習視察の宿舎として2日間の滞在でしたので、ご避寒のために毎年冬季に長期間滞在された大正天皇の行幸に因むものと考えられます。

同じ川の上下流に架けられた2つのみゆき橋の存在は皇室を敬愛する当時の人々の心を今に伝えてくれます。



まえはら みゆきばし
前原の行幸橋

『一枚の絵葉書から』

絵葉書の写真は牛臥の浜水門近くから志下や鷲頭山の方向を望んだものです。葉書の宛名面から大正7年(1918)から昭和8年(1933)にかけて使用されたと考えられるものです。

写真の中央は東京府立第一中学校(日比谷高校の前身)の水泳場として使われた牛臥桃郷海水浴場です。その後方、松林の下に石垣に囲まれた大きな建物が見



絵葉書 沼津牛臥東京府立第一中学校水泳場と沼津御用邸遠望(永井印刷所製)

えています。前面の石垣は西付属邸の方向に延びているようですが、繋がつてはおらず、少し隙間があります。石垣の右端が本邸との境のようです。西付属邸前の石垣には海岸への出入口が設けられています。

大正11年(1922)の「沼津御用邸総図」にはこの位置に「附属家」と記入された建物が描かれています。

また、宮内庁の「沼津御用邸写真帳」には「西付属邸西海岸本邸附属建物」として石垣の上に建てられたスレート葺きと見られる洋風と瓦葺きの和風の2棟の平屋の建物が写されています。単独の別荘建築のように見えますが、後の敷地図では建物敷地は、西付属邸の石垣の中に組み込まれており、建物は描かれていません。

『昭和天皇実録』明治37年3月23日の項には裕仁親王が「従一位中山慶子御宿泊所(沼津御用邸付属邸建物)」にお成りになった記事があり、これに相当するようですが、東付属邸も「附属建物」と呼ばれていたともあり、混同している可能性もあります。明治40年(1907)に没した従一位中山慶子(明治天皇の実母)のための宿舎であったようですが、短期間のようで、その後の記録には、東付属邸に滞在したとあります。

資料館からのお知らせ

第2回歴民講座の開催について

本年度第2回の歴民講座を1月18日に市立図書館視聴覚ホールを会場に開催しました。

甲斐武田氏の研究家の平山優さんを講師に戦国期の市内根古屋の興国寺城の城代として河東地域の武田氏支配の中核を担った曾根昌世についてお話をいただきました。

近年新たな資料が発見されたことにより、その経歴についての補完ができたそうです。



歴民講座の講演の様子

後期特別展について

開館50周年を記念する特別展「れきみんのおたから」展を3月30日まで開催しています。

今回は絵画などの彩色資料の保全のために、会期を2期に分けて展示しています。

後期は新しい時期の版画や絵画に入れ替えています。収蔵庫に保存されたままで、なかなか公開する機会がない貴重な資料ですのでぜひともご高覧下さい。

沼津市歴史民俗資料館だより

2025.3.25発行 Vol.49 No.4(通巻245号)
編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436
URL:<https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp